

令和6年度 第2回磐田市総合教育会議 会議録

日 時：令和6年7月18日(木)午後3時30分～午後5時

会 場：磐田市役所 西庁舎3階 特別会議室

出席者：市長、教育長、鈴木好美委員、秋元富敏委員、大橋弘和委員、阿部麻衣子委員
(出席者6名)

事務局：企画部長、こども部長、教育部長、政策推進課長、幼稚園保育園課長、教育総務課長、
学校教育課長、政策推進課総合戦略グループ長、学校教育課指導グループ長、
教育総務課総務企画グループ長、担当

傍聴者：なし

【会議次第】

1. 開 会

2. 市長あいさつ

3. 協 議 事 項

保育・幼児教育と小学校との円滑な接続に向けた取組について

4. 閉 会

[協議の主な内容]

発言者	発言内容
	<p>保育・幼児教育と小学校との円滑な接続に向けた取組について</p> <p>市長 皆さんこんにちは。今日も大変お忙しい中、また暑い中、足を運んで頂きましてありがとうございます。堅苦しい挨拶は、このくらいにして、端的にいきたいと思えます。</p> <p>まず向陽学府小中一体校が今週末、起工式を無事に迎えることになりました。子どもたちの教育環境が今より悪くなることは絶対になくて、絶対に良くなるわけですから、安全性をしっかりと担保しながら、私たちができることを前に進めていくということだと思っています。起工式では、私も精いっぱい挨拶をしていきたいと思えます。</p> <p>それから、磐田版のラーケーションということで、探求の日「いえたん磐田」というものが豊岡学府のほうで始まることになりました。同年代の保護者たちから、平日に休んでいる子たちがいるけれどもいいのかという声だとか、一方で経験のためにこういうところに連れて行きたいけど休ませていいのかと、休んでいる人と休んでない人がいるのは不公平じゃないかと、真面目な人ほど休めないという声を聞いていました。愛知県で始まったときに、教育長と相談しながら、磐田ならどういう形で進めていくのがいいか、教育委員会の中でも揉んで頂いて、こういうやり方でまずは進めていこうということになったことに対して、ご理解を頂きありがとうございます。青年市長会でも、愛知県の教育委員会が来て説明するぐらいですから、この前教育長の会議の中でも、他市、他県の教育長から説明があったのですか。</p>
教育長	<p>そうですね静岡県もどうですかとアプローチがあったということです。</p>
市長	<p>だんだんと進んでいく方向性であることは間違いない中で、磐田市が前に一歩進めたというのは大きいと思っていますところ。ご協力ありがとうございます。</p> <p>それからフリースクールの関係、これも長年の懸案事項で、子どもたちの選択肢を増やすという意味では、ラーケーションの話と近いところではあります。やっぱり行けていない子が一定数いて、多様性の中で選択肢を増やしていくということは非常に大事だと思っています。高校は通信制がものすごく増えている以上、義務教育も通信制を選んでくる子たちがこれから出てくるかもしれない中で、磐田市はやっぱり人と人とがやっぱり触れ合える場をいろいろな形でつくっていくことに対して、ご理解、ご協力を頂いてありがたく思っています。</p> <p>それから最新の日経グローバルに、部活動の地域移行の関係で、磐田市が特集で取上げられていました。磐田市は先進的な取組を行っているということのあ</p>

らわれではないかと思っています。

先だって磐田市に経済産業省の教育産業室の室長さんと、担当の方が磐田市に来てくれました。午前中だけで帰る予定だったのですが、午後から私がたまたま豊岡中学校で1限、SDGsの授業をやってほしいというような話があったので、連れて行きまして、一緒に授業に参加してもらいましたけれども、「非常に磐田の子どもたちはいいね」と、挨拶もしっかりできるし、しかも災害の話なんか私もしたので、ドンピシャで、すごく真面目に前向きに聞いてくれたし反応もよかったのですが、ああいう子どもたちの姿を見て、非常にいい思いを持って霞が関のほうに帰ってくれましたので、そういう機会をもっと増やしていかなければいけないと思っています。

話が長くなりましたが、今日の午前中は子ども・子育て会議の第1回目やりました。もしかすると皆さんあまりぴんとこないと思いますが、今年度は、こども計画とこども権利条約というのもつくっていきます。会議で並んでいる顔ぶれを見ると、半分ぐらいはPTA関係の方々です。いわゆる学校の課題もたくさん出てくるのではないかと思います。ただ今日もその場でも言ったのですが、所管はこども部なので、今日はこども部の人を中心に、学校についても忌憚なく言ってくださいという話もさせていただきましたから、また情報を共有していただき、それは教育委員会の皆さんにも、共有したほうがいいねということとか、一緒になって課題を解決するところがあると思います。

そういう中で今日、皆さんが選んで頂いたテーマが、保育・幼児教育と小学校との円滑な接続ということで、まさにこども部と教育委員会の連携の話が中心になってくると思いますし、今日は竜洋西小学校の宮沢先生の資料を見るだけで熱量が伝わってきます。楽しみだなと私自身もここに座って感じました。皆さんと良い対話をしながら、一つでも課題が解決できるように、子どもたちの環境が良くなるように、今日の時間を大切に過ごしていきたいと思っています。本日はよろしくお願ひします。

事務局

ありがとうございました。それでは、この後の会議の進行は、議長となります市長にお願いをしたいと思います。市長進行よろしくお願ひいたします。

市長

それでは協議事項に移ります。先ほど申しあげましたように今日は教育委員の皆さんから提案頂きましたテーマです。保育・幼児教育と小学校との円滑な接続に向けた取組についてであります。初めに幼稚園保育園課長に来ていただいています。課長から説明をしていただいて、そのあと竜洋西小学校の宮沢校長先生に現場での取組についてお話を頂いた後、皆さんと意見交換をしたいと思います。それでは、よろしくお願ひします。

幼稚園保育園課長

今回のテーマにつきまして、学校教育課、幼稚園保育園課の現在の取組状況について説明させていただきます。

保育園・幼稚園・こども園と小学校の先生による合同研修会が始まったのは、平成24年度からになります。幼稚園保育園課では乳幼児における教育、保育で大切にしたいことを、「主体性を大切に、環境を通して行う保育」とし、教育要領や保育指針に基づいて指導を行っております。磐田市では全認可園、小学校で接続カリキュラムを作成し、互いの保育・教育を参観・協議することで、円滑な接続に向けた取組を行っています。しかし、円滑な接続については課題もございます。今日は、接続カリキュラムの事例発表を含め、円滑な接続に向けた取組や課題を前大藤こども園長で、現在の竜洋西小学校の校長先生であります宮沢先生より説明していただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

竜洋西小学校長

竜洋西小学校の校長の宮沢です。令和4年・5年度の2年間は前大藤こども園の園長を務めさせていただきました。先ほど幼稚園保育園課長からお話があったように、幼小の円滑な接続についての概要説明がありましたが、自分からは、園と学校両方の立場から、具体的な実践・取組について説明をさせていただきます。

まず資料Iをご覧ください。1ページ目から4ページ目までは、園長先生方に対して、連携は接続の基盤となるものであり、園長のリーダーシップのもと、園長自らも積極的に小学校と連携を図ることがとても大切です、というのを伝えるための資料となっています。

また、多くの教員は、接続とは、園児と児童の交流がメインという意識がとても強くて、交流さえしていれば接続はうまくいっている、また、職員が年数回の研修の交流や、お互いに公開保育や公開授業を1回、2回実施しただけでも接続ができていのではないかと考える傾向が強いと私は現場にいて感じます。

5ページをご覧ください。架け橋期におけるアプローチカリキュラムとスタートカリキュラムの重要性について視覚的に分かりやすいように2種類の資料を作ってみました。右上の資料にありますように、5歳児と1年生の2年間は架け橋期と呼びます。5歳児がそれまでの経験を生かしながら新たな課題を発見し、新しい方法を考えたり試したりして、実現しようとしていく時期、いわゆる園の出口の部分を小学校入学に向けて行うアプローチカリキュラム、そして、幼児期に培った力が1年生以降の学びや生活へと発展していく力を身につける時期に実施するカリキュラムをスタートカリキュラムといたします。それぞれのカリキュラムが円滑に接続していくと、接続の部分においてリスタートとならない分、育まれる力、青い矢印と黄色い矢印を見ていただければ分かると思うのですが、1回切れてしまうと伸び率が低くなる。このままうまく接続していくと、ぐっと広く広がるというところを視覚化したものになります。

小1プロブレムという言葉が皆さん聞いたことがあると思うのですが、入学したての1年生は、集団行動がとれない、授業中椅子に座ってられない、話を聞けないなどの状態が数か月間継続するという問題です。入学前までは、園生活の中で遊びを通して多くのことを学びますが、入学した途端に45分間座ったまま授

業を受けたり、集団で行動したりする生活に変わってきます。そのため、このような問題が起きるのは無理もないと思います。また、子どもたちはわくわくする気持ちと同じくらい、どきどきする不安感も抱いています。簡単に解決できる問題ではありませんが、大藤こども園では、子どもたちが安心して小学校に入学することができるよう、隣接園という利を生かしながら、幼小接続の視点でアプローチ的な実践を行いました。

6ページ目をご覧ください。2月のとある金曜日です。年長キリン組では担任が小学校生活の一部を紙芝居形式で紹介しました。「小学校のことで何かわからないことはあるかなあ。」そんな担任の問いに、「お兄ちゃんから聞いたことあるけど、知らないことばかりだよ。」とか、「見たいから行ってみたい。」というような意見がたくさん出てきました。子どもたちの反応に担任は、「いきなり学校に行っても大丈夫かな。」「園長先生大丈夫ですか。」とか、「校長先生に聞けばいいのかな。」と、少し演技をしたわけですが、そんな仕掛けの第1弾に代表の子どもたちが、大藤小の校長先生のところまで、探検のお願いをしに出かけました。

7ページをご覧ください。上の2枚の写真は、緊張でがちがちの園児3人です。行く気満々だったのに入った途端に喋らなくなってしまったので、校長先生が上手に学校探検をしたい思いを聞いてくださって、「それならいいよ。」ということでも了解を頂きました。急いで教室に戻った3人は、そのことを嬉しそうに伝えると、みんなは歓声を上げてガッツポーズをしました。大喜びをしているシーンが左のところなのですが、こうして探検をすることが実現しました。いろいろな発見をしてこよというキリン組、共通の目当てを立てて、月曜日の朝、学校探検に出発しました。やらされているのではなく、自分たちがやりたいという思いを強く持った活動だけに子どもたちの目の色が違いました。教師の深い子ども理解に加え、うまく環境設定で数々の仕掛けをしたことにより、主体性を育むことを大事にしたアプローチ的な活動となったわけです。約2時間、じっくりと大藤小学校に探検させてもらいました。様々な発見をした子どもたちは、園に戻り、分かったことやもっと知りたいことを出し合いました。8ページ、タブレット見てすごいなあとか、6年生のみんなが前を向いてしっかり授業をやっている姿とか、5年生の理科の電磁石の実験のところをみんなに「やってごらん。」と言って、優しく女の子が声をかけてくれている場面もあるけれども、子どもたちは、興味津々でした。この下の2枚が子どもたちの感想や新たに生まれた疑問などです。園の子どもだけでもこれだけいろいろな発見をするのだなということを改めて私は園長の立場からびっくりしました。不安な思いもあった園児はもちろん、年長児全員が学校へ行くのが楽しみだと思えるようになり、小学校がとても身近な存在になった瞬間だと感じました。

10ページをご覧ください。アプローチカリキュラムと並行して、本来、園はそこから関係ないですが、小学校が進めていくスタートカリキュラムについても、あえて私のほうがかなり入らせていただいて入学後に安心して学校生活をスタートできるように、大藤小学校の先生と相談を重ねながら計画をしていきました。11ページをご覧ください。今回のスタートカリキュラムの目玉は、何といても時間割です。11ページの大藤小スタートカリキュラム、これが1週間ごとのカリキュラム

になります。資料2の3枚目にスタートカリキュラム1週とあります。今年の竜洋西小学校の第1週のスタートカリキュラム、これと同じようなものをつくっていったということなのですが、5月中旬までの1時間目と水曜日の5時間目を、園庭で遊ぶということにしました。わざわざ学校に行った子どもたちを園に呼び戻して園でみんなと遊びませんかということをやりました。大藤小学校が本当にやってみましょうかということで工夫してくださったのですが、令和4年度末には、学校長が砂場にトラック2台分の砂を入れてくれて、園の砂場とすぐ近くに砂場があるものから、両方合わせて使用できますという砂場にしてくれました。そういう環境整備についてもとてもありがたいと思いました。こうして迎えた4月、いよいよスタートカリキュラムが始まりました。1年生の担任、それから教育支援員、園の職員がそれぞれ役割分担をしっかりと決めた上で、子どもたちの支援をしていきます。園児たちも園庭に出て、入学したての1年生とともに遊びを通した学びを思い切り楽しみました。子どもたちの目は、どの子もきらきらと輝いて生き生きとしていました。それが11ページの2枚の写真になります。園の砂場での一場面、こんな場面がありました。子どもたちから「入れて。」「いいよ。」、振り返ると、違う園の卒園児が集まって会話をしていました。小学校の砂場では、同じように園児と会話をしている1年生もあらわれて、思わず私は微笑んでしまったわけですが、1年生の半分は他園の卒園児です。不安な気持ちが吹き飛ばすように私からも分け隔てなく声をかけたり支援をしたりしました。スタートカリキュラムの後半では、全園児が1年生とともに、園庭を中心に遊びを満喫する日も計画されました。大藤こども園の園庭は、そんなに広くはないのですが、いつもまばらに子どもたちが遊んでいて、その日は総勢100人が大藤こども園で全力で遊んでいました。夢中になって遊んでいる姿に大変うれしくなりました。そのあとは、1年生は少しずつ、遊びからだんだん教科学習へと移行しながらスタートカリキュラムを進めていきました。

資料2のA3判のものは、竜洋西小学校の今年の接続カリキュラムです。市内の公立園、それから公立小学校は全てこのA3判のものを作成しています。作成時の説明資料がその後の2枚目になっているわけですが、これは静岡県版幼少接続モデルカリキュラム「じぶんでできた!いっしょにやろう」というもので、市がカリキュラムをつくる際の参考資料として県が出しているものです。これを見るとピンクと緑とブルーで生活タイム、なかよしタイム、学びタイムの3つの活動について、1か月間の間に活動比率を徐々に変えていくように説明されています。これを見ていただくと、だんだん学習のほうを強くしていくということが分かると思うのですが、より具体が分かるように、竜洋西小学校のスタートカリキュラム1週のものもつけました。園で体験した遊び等を取り入れ、安心感を持たせられるように工夫をしているのが分かります。特に1時間目で、15分ずつに分割しているのが分かると思います。先ほど紹介した大藤小の実践は、竜洋西小学校のスタートカリキュラムを、もっと大胆に遊びを軸として構成したということになります。こんな細かくやらないで、もう園に行っただけ思い切り遊ぶ、それを職員全員でいろんな子どもの動きを見て、情報交換をするみたいな、子どもたちはその遊びが楽しみで学校に通ってくるみたいなことを1か月間、粘り強くやったということです。

たった1か月の実践でしたが、大藤小の職員からは、このような感想がありました。「今年の1年生は、朝泣く子が全くいません、びっくりです。」「スタートカリキュラムを組んだことで、子どもたちが安心して学校に来ていると感じます。」「この時間をみんな、とても楽しみにしていました。」「子どもたちは遊びが大好きで熱中します。遊びイコール学びをベースにすることは大事ですね。」「園と小の段差が緩やかになったと思います。」このような感想を先生方から頂いて、やって良かったなど、校長先生とも話をしたところです。園と小学校に今まで以上の太いパイプが築かれたことは、もう間違いないなということその場で感じました。

磐田市の小学校と隣接している公立園は、21園中15園ではないかなと思います。市内に総数の7割ほどが隣接しています。思い切った実践を行いました。他の隣接園も学校でも、実践可能なことだと感じました。ただ、幼稚園保育園課から頂いた資料を見ると、令和4年度の時点で公立園の年長児よりも私立園の年長児が多いということに、いろんな策を打っていかないと、なかなか難しいことが起きるなということを感じた次第です。竜洋に3園あります、竜洋幼稚園、竜洋東こども園、めいわ竜洋保育園。1学期にどの園にも3回ずつ足を運んできました。今後も利用者の接続がさらに円滑なものになるように、私は私の立場でできることから取組みを進めていけたらと思っています。

以上で説明を終わります。ありがとうございました。

市長

ありがとうございました。幼保課長、今の話聞いて、数字的なものとか何かありますか。

幼稚園保育園課長

各園でも主体的保育、接続に向けた取組を長年やってきております。隣に小学校がある園から、「園でやっていることが小学校に行って活かされているのだろうか。」「保護者の理解を得ていくことが難しい。」といった相談も受けています。今年5月にその小学校の校長先生にお時間を頂いて、先生も3人ほど入っていただき、園長・主任と幼稚園保育園課職員とで、いろいろとお話をしました。幼稚園の取組の話をしたのですが、先生から「この小学校1年生は28の園から入ってきている。」といったお話もありました。隣接する幼稚園とだけ連携していくのは、なかなか難しいのかな、と思いました。ただ、園でやっている取組への理解はしていただけだと思います。先生同士の交流とか研修をやりましょうと。幼稚園の主任がずっと以前、この幼稚園にいたときは、小学校の先生と頻繁にやっていたらしいです。それがコロナもあり急激になくなってしまっているものですから、また前みたいに始められたらいいなという感じです。そういった機会をどうやって持っていくのがいいのかと思っています。

市長

28園から来ているというのが1番多いくらいですか。

幼稚園保育園課長

近くにいくつか保育園もございますので。地域性があると思います。

市長	学校教育課長、何かありますか。
学校教育課長	<p>数字的なものはないですが、自分の所見というか、私見的なところでいうと、自分も2年間、小学校の校長をやらせていただきました。もともと中学校ですので、小学校に行ったときに低学年、特に入学期の子供たちの様子というのは、はっきりと衝撃を受けました。ただこれはコロナの影響もあったのかなと思いました。最近学校を周り、話を聞くと、ここ2、3年前の子供たちの様子が少し変わってきているなど。泣いたりする子が少し減ってきていると思います。コロナの影響が少し変わってきたという部分と、これまで取り組んでこられた部分も少しずつ生きてきているとは思いますが、自分が感じたのは、これまでの自分たちが思っている枠、こうでなくてはいけないみたいなものは少し取り払っていかないといけない時期に来ているのだというのは感じていました。今日の話聞いて、改めてそれは実感しました。</p>
市長	ありがとうございます。両部長どうでしょうか。
こども部長	<p>年度当初、豊田南こども園に行かせていただいたときに、園長先生から、よく教頭先生が園の様子を見に来てくれるので、「私たちも学校の様子が園庭から見るができる。」「園児に主体的な保育をしていますよ。」と言ったら、「今度の運動会の種目を決めるときに先生が決めるのではなく、子どもたちに決めさせるようにしました。」と言われたようです。幼稚園の先生が、自分たちがやってきた主体的な保育が小学校につながったというのを感じたというところで、「すごく良い関係が持っています。」とお話を聞いて、やっぱり先ほど言った地域性や学校の規模の大きさとかいろいろあるとは思いますが、その連携がうまくいっている幼小接続の1つだと感じました。</p>
市長	教育部長どうですか。
教育部長	<p>最初にデータを示します。施設数ですが、昨年度、幼稚園12園のうち公立が10、私立が2。保育園15園のうち公立が3、私立が12。こども園16園のうち公立が8、私立が8。それ以外に地域型保育や、認可外施設等々がありますが、児童発達支援施設への並行通園もありますので様々なところから来ているというのは、実態として理解をしなければいけないと思ってください。これは22校に行っているということですね。あくまでも今は接続の視点におけることで考えていますが、当然、保護者のニーズをカバーするため、待機児童の解消のため、費用対効果のため、施設の再整備のため、様々な視点においては、民営化はやむなしということで磐田市は、進めてきております。そこは、理解を頂きたいというのが1点です。</p> <p>そして2点目は、違う視点で触れますが、現在、子供の数が減っていますが、多様性は増してきています。身体的や心の多様性、あとは家庭環境における多様</p>

性、それと外国人も含めて言語の多様性、そういうものも全部含めて今現在、公立の取組、そこはすごいいいことをやっているのだけれども、私立園においても、それに近いものを下ろしていきながら接続をしていかなければいけないというのは、我々も課題として捉えています。以上です。

市長 ここから教育委員の皆さんに質疑応答、ご意見を頂きたいと思います。まず質問からいきましょう。なければ意見から。

委員 小1プロブレムの話は聞いているので、そういうことがあると思っているのですが、実際には磐田市でどの程度の問題が起きているとか、それとか年々増えているのかとか、地域性があるのかとか、その辺りは、理解していないので何か傾向がありましたら教えていただきたい。

学校教育課長 小1プロブレムという視点でいうと、そこに限定した数値はとっていないです。ただ、雑感として、小学校における様々な課題というのは、増加傾向にあると思っています。それが幼・保・小のつながりに特化した話かどうかはわかりません。

教育長 昨年、顕著にあらわれてしまったのですが、生徒指導報告とあって、小学校や中学校から上げてもらっているものになるのですが、昨年は、小学校の中で小1が1番か2番目に多かった。いわゆる、子供同士の暴力や対教師、あと不登校も含めて。そういう事が顕著に出始めたなという危機感を持っています。
今年もすごく気になって見てはいるのですが、まだ傾向が続いているかなど。去年だけのあらわれなのか、持続的に見ていかななくてはいけないと思っています。

市長 他の方がいかがですか。全体に対しての質問でもいいですよ。

委員 竜洋西小のこのスタートカリキュラムを見て、1週間ごとに先生達がこんなに細かく計画を立てているなんて知らなかったです。本当に先生達には、頭が上がりません。幼稚園で主体性をとということで、取り組まれているということで、自分も学校訪問とか1年生の教室とか見ると、静かに授業を受けているところもあるし、元気に授業を受けているところもある。先生としてどっちがやりやすいのか。せっかくいろいろと主体性でやっているのにやっぱり静かに聞いてもらうほうがやりやすいんですか。

市長 宮沢先生どうですか。

竜洋西小学校長 私は今までに1回しか1年生を受け持ったことはありませんが、2年生がなくて低学年は1回だけなんです。最初園に行ったときに、こんなに遊んでばかりでいいのかと正直思いました。しかし、遊んでいるだけではなくて、その中に全て学

びがあるということ、目の前で毎日、見ていたので。今、学校の職員にどうやってそれを伝えたらよいか。1週間前までは褒めてもらっていたことが、1週間たったら「静かにしなさい。」「もうしまいなさい。」となるので。明らかにそこですね、幼稚園から小学校の違いは。それがあります、現実。去年と今年、私は見ているので。自分の立場としても非常に難しいのですが、でも、変わらないといけないのは、園というよりも学校かなど。両方の経験をさせてもらい、そのように思います。

市長

僕から教育長にいいですか。宮沢先生のようにこの体験をしていただいている先生たちは、将来的に水平展開をしてもらいたいという思いでいるんですね。その先生が活躍する場は、ありますか。今、自分の学校だけでも大変だと思えますが、1年生を受け持つ先生に今みたいな話をする機会は。僕ら10分ぐらい聞いて、なるほどと思いますがそういう時間もないのかな。でも先生みたいに、両方に行っている先生たちをどんなふうに使おうとしているのか、活躍してもらおうと考えているのか。

教育長

そうですね、あえて1年生対象の先生方に対して、そういう研修の場というものがなくて、今、こども部が中心になってやっていただいている、平成24年からスタートした保・幼・小の連携協議会、それ以外は、今はなくて、来年度以降、どういう事業展開をしていかないといけないという話をする中でテーマとして幼・小の接続の話を見せてもらいました。なので、研修の機会を増やせばいいという問題ではないが、本当に勘どころをきちんと押さえながらどういうふうに学びをつくっていくのかというところは行っていかなければいけないと思っています。これからの教育、それこそ幼稚園の遊びから学ぶという、子どもたちがやってみたいとか、これ何だろうとか、子どもたちの？(はてな)が、遊びの中で学びにつながっていくので、これからの教育というものはもうそれが探究的な学びの中心だと思います。だから、先程宮沢さんが小学校を変えろと言ったけど、今、中央教育審議会という、教育の在り方を検討している会があるけど、やっぱりそこが大きな課題。幼稚園は、遊びが中心、でも学校は、教科書があり、教える内容が決まっています目的が決まっています、そこで学んでいくカリキュラムになっているので、そこをどういうふうにしていけばいいかというのだけど、さっきの主体性とか、自分で思って学ぶってところを考えると、小学校が幼稚園、保育園、こども園の学びを学ぶことが必要。そこで芽生えた力、やってみたいが、学びの芽って幼稚園で言われているけど、それは小学校も全く同じだと思うので。僕は校長会などでもいつも言い続けているのですが、教育観や指導観を少しずつ変えていく。そのために、また宮沢さんに活躍していただきたい。そういう感じで、今までも交流の中でやってきているので、そういう方々に活躍してもらいたいと思っています。

市長

皆さんどうですか。ほかにご意見は。

委員

私、3回ぐらい、幼・保・こ・小の合同研修会に行かせていただいているんですが、幼稚園の先生が小学校の先生に意見を言えるようになったところが見られるようになりました。今までは、小学校の先生が強くて、小学校の先生がこういうふうな子に育ててきてくださいというスタンスが多かったと思うのですが、例えば、「牛乳パックをたためるようにしてください。」というような「これをやってください。」というのがすごく多かったのですが、そうではなくて、幼稚園は全体でこういうことやっているの、ということを意見が言えるようになった。向笠幼の先生などは、前年度に自分から小学校に、「すみません、このときにこういうことやりたいのですが、小学校のカリキュラムは、どうなっていますか。」と提案をしたそうです。こういうふうに幼稚園の先生がどんどん意見が言えるようになってきただけでも全然、違うと思いました。

昔は小学校の隣に全部附属の幼稚園があって、校長先生が園長先生と兼務だったから、連携が結構できていた。その時代の校長先生は、すごく幼稚園に理解があって、幼稚園のことをよく知っていて、「幼稚園の先生って子供をこんなにしっかり見ているよ。」っていうのを小学校1年生とかの担任の先生に言ってくださったのかなと思って。それが今、園長先生が変わったことによって、そこが切れたものだからこういうふうに会議をしないと、研修会をしないと、幼稚園の思いが小学校になかなか伝わっていかなくなったのかなど。私は、そういうふうに感じました。浜松市の友達が、今、教頭先生をやっているのですが、幼稚園の先生をやりました。園長か主任かわからないですが、それで昨年、小学校低学年の見方が変わったという話をしている、幼稚園に送り込めばいいのではと思ったのですが、県職と市職では、駄目とかいろいろあって、今度は幼稚園の先生で、小学校の免許持っている人が絶対いると思うので、その先生をふるさと先生のような予算で小学校に送ろうと、それが無理なら支援員みたいな立場で、でも小学校の免許を持っていたら小学校1年生の授業をできるのではないですかと思っていて、しばらく見た後、1年生の生活科とかやらせてみたら面白いかなと私はすごく思っています。そういう人を小学校に送り込むとかそういう交流。結構、小中の先生の交流は、この頃かなりやっていると思うのですが、幼稚園と小学校ってなかなか、市職と県職という立場もあると思って、管理職レベルではできるのかもしれないのですが。

この間の研修会では理解をもって小学校の授業を見ましようとか、理解をもって幼稚園の授業を見ましようということを言っていたと思うのですが、それ以外にやっぱり長い間、例えば1週間続けてとか、朝から晩まで見るというのは、先生たちにとって、思考が変わってくるきっかけになるかと。もちろん大変なのは分かっていますが、そういうことが、あればいいなとは思っていました。以上です。

教育部長

宮沢先生が、大藤の園長先生をやっているときに、学校の先生が幼稚園の現場に来なければこんなの絶対に理解できないし分からない、何人も送り込まないと駄目だと熱く語ってくれたことを覚えています。今日の午前中ですが教育長と激論を交わして、県職の先生と入れ替えるとお金がかかるんですけど、さっき言っ

たように1週間とか1か月では、駄目だと思います。1年以上は行かせなければ駄目。それを教育長と議論をしていて、これをまず公立から進めるなら本当に意識を変えないと変わらないと僕は思っています。

委員

自分が幼稚園の免許を持っているのですが、大学で習ってきた幼稚園は、本当に遊びの中に学び、だからそのために先生たちはありとあらゆるものを準備して、この子がどれに興味を持つか、こっちに興味を持つか分からないけど、その分、無駄になってしまうかもしれない準備をたくさんして、その中から拾い上げていく。だから先生の技量がすごく必要だし、ベテランの先生なら、うまくまとめて、うまく遊びの中から気づいたことをあげる。今のカリキュラムに合っているというところをどんどん上げていける。けどそうじゃない先生、若い先生には、そこまではできなくて、決まったことをきっちりやりたい。結局、先生の技量になってしまうのも困るのでそれをしっかりカリキュラムでやっていこうということだろうと思っています。

市長

そろそろお時間になってきてしまったので、最後いかがでしょうか。

委員

富山からこっちに越してきて、そもそも附属幼稚園という制度がなかったのも、それが分からなかった。附属幼稚園というその制度自体の何かこう意味とかメリットとかデメリットも含め、なにも分からず、子供を幼稚園に入れていて、でも近いから交流のしやすさという利点がある。校長先生が園長先生を兼ねていたという話を聞いて、なるほどと思っていた中で、今幼稚園、保育、こども園、学校の訪問に行くと、なるべく交流を、共有を、と特に幼稚園の先生方のほうが一生懸命訴えているなど感じています。でも、小学校の先生も受入れないではなくて、いろいろな園から来る子供たちを何とかしようと思っていると感じていました。

市長

ありがとうございます。それではお時間になりましたので協議事項は、これにて終了して進行を事務局にお返ししたいと思います。

事務局

長時間にわたるご協議、ありがとうございました。事務局より事務連絡をさせていただきます。第3回総合教育会議ですが、12月頃の開催を予定しています。日程・会場は事務局にて調整し、追ってご連絡いたします。以上で、令和6年度第2回磐田市総合教育会議を閉会いたします。ありがとうございました。